

臺灣總督府
臨時情報部

報部

昭和十二年九月二十日創刊
昭和十四年十月二十一日發行
（毎月一日、十一日、廿一日發行）



銃前銃後相呼應して

廣東攻略一周年を迎へて

南支派遣軍

慰問運動會開催

總督官房會計課

烏都の銃後援護の姿

總督府情報部

全臺灣學校皇軍慰問取扱狀況

文教局學務課

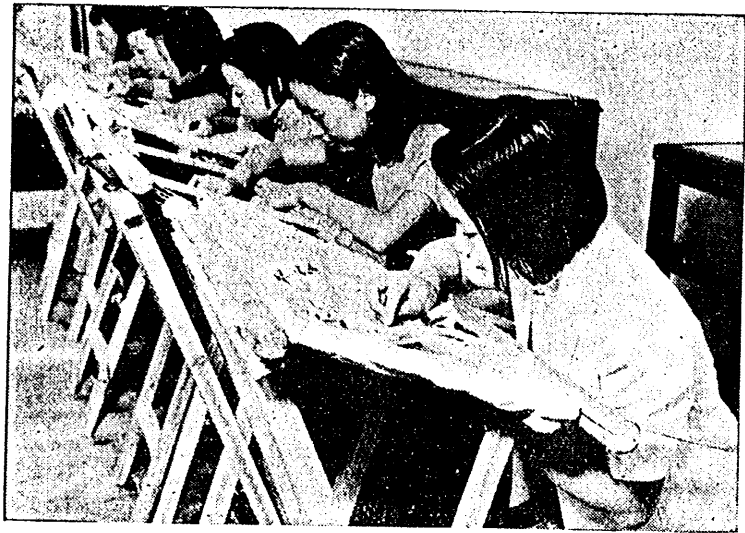
内外新聞論調

◆地方情報

◆旬間日誌

十月下旬號

〔第七十七號〕



興亞の華

中國文化の都、廣東に攻略一周年は訪れて諸施設は、新な姿で活潑な動きを開始してゐる。この平和の息吹のなかに繊細な技を刺繍に生かしてゆく姑娘の和かな面は歡喜に満ちてゐる—廣東女子職業學校にて—

十月九日(月)

▽政府、外務の意見一致、貿易省設置問題に關する外務省紛擾解決 ▼潮州善後委員會成立祝典舉行

十月十日(火)

○臺灣電力會社々長に林安繁氏任命
十月十一日(水)
○後宮侍太郎氏、兩方資料館建設費資金に百萬圓寄附 ○廣東訪日團來臺

旬間日誌

十月十二日(木)

▽大藏省発表、九月中の對滿支貿易、輸出超過、一億三千四百餘萬圓 ▼パ
イアス灣敵前上陸一周年記念日
▼「米國の和平願望を希望」獨逸新聞長官聲明

十月十三日(金)

▽大御心の程長し、歌御會始御題

「迎年祈世」と仰出さる ▼航空安全保障を期す総合的計畫閣議で決定 ▼外務省紛争問題圓滿解決、課長、事務官等の辭表却下さる ▼陸軍、渭水北岸の高陵、咸陽を空襲。海軍、廣西廣東兩省に互り大爆撃敢行

十月十四日(土)
▼教育總監に山田乙三中將、陸軍次官に阿南惟幾中將轉補さる ▼中支軍發表一宮山周邊の作戦完遂、次期作戦準備に移れり ▼獨逸、大本營を、ドイツ・ベルギー・オランダ國境のアーヘンに設置 ▼イギリス主力艦ロイヤル・オーク號、ドイツ潜水艦に撃沈さる

十月十五日(日)
▼陸軍の大編隊、延安、宣川を大空襲
十月十六日(月)
▼護國の英靈七千八百五十四柱に畏し
論功行賞、第十七回(陸軍關係第十五回)の御沙汰 ○臺灣穀穀灰組合創立
▼酒井忠正伯爵に親任せらる

十月十七日(火)神嘗祭

○傷痍軍人、職業再教育を各州廳で實施 ▼英靈一萬三百七十九柱永久に神鎮り給ふ靖國神社招魂式 ▼コロンソ問題五箇月振で圓滿解決、協定文を交換 ▼嵐山忠靈塔除幕式舉行

十月十八日(水)

○府教育調査委員會開催、義務教育案可決 ▼海軍々務局長更迭 阿部勝雄少將轉補 ▼價格統制令公布二十日より施行、新統制令の公布に伴ひ暴利取締令改正 ▼軍需工場検査令公布 ▼意見一致せず、ソ土交渉決裂、トルコ外相モスタワより歸國 ▼帝國とイラ
ン國修好條約調印

十月十九日(木)

○臺灣産葉煙草、パット原料に十二萬疋内地向移出さる ▼「石炭問題、米穀對策の樹立」に付き阿部首相閣議に提出 ▼日米陸軍隊コロンソより撤退 ▼東地中海の共同防衛に關する英佛土相互援助條約正式調印

銃前銃後相呼應

★ 銃 廣東攻略一周年を迎へて

前

南支派遣軍

山崎隊 山崎 大尉

廣東攻略の一周年を迎ふるに當り、我等の腦裡を掠め胸搏つものは南支の山野を紅に彩り、貴く散つた幾多の戦友の霸氣に満ちた闘志満々たる勇士の幻影を夢見する護國の神と化し、九段に咲く英靈に默禱暫、御靈安かれと念じ稿を練る。

本稿は「部報」の廣東攻略一周年特輯號に對して南支派遣軍報道

青史を飾るパイアス 灣奇襲上陸

惠州増城の堅壁を一揆みに廣東を指呼の間に眺めた時、既に死の街と化した廣東戦禍と支那特有の強奪放火に禍せられた廢墟の街が、時の流と皇軍の進駐に新しき軌道に乗つて、戦争から建設への段階に入つて急速な變化に新事態を現出した一周年を迎へた今日、戦前の股賑を呼び戻しつゝある南都廣東、從來の經濟的重要性と軍事的價值が如何なる役割を果して居たか、已に諸氏が周知の事實である。斯くも飛躍的に進展し

部より情報部宛寫真と供に提供されたものである。

明るく蘇る 廣東の静かな全貌が短

時日の中に形勢正に復興の域に達しつゝある過程を繰り見る時、各人各位が自己の職責遂行に奮勵し一死報國の念に燃ゆる愛國の至情横溢せる心情が察知せられ、又此の衝に當る當事者の勞苦や思ふに餘りあり。此の陰に潜む幾多の苦闘に伴ふ美談逸話數へ挙げれば枚舉に追がな

い。 現下北、中、南支の一般戦況を見るに、支那は軍事的に敗北の連続にありながら、今尙氣息奄々として遊撃戦法の反覆に



上は廣東日學校で學勉せぬ姉妹の姉妹
下は同校の樂ししい修了式

誇張した、所謂何々攻撃とか、或は何處々々奪還の指令を發しては事前に盡く我が軍の爲に破挫せられ、今や軍事的勝敗の數は既に明らかなれど、歐米蘇依存の迷夢覺めやらぬ蔣は、飽くまで長期抗戦を叫び乍ら焦土抗戦に無辜の民を塗炭の苦しみ追ひ込んで居る。



(ミンシンの音も賑やかに廣東女子職業學校の和氣盛々振り)

而して今や歐洲の動亂は日々擴大の一途を辿り、従來行ひ來つた援蔭が果していつまで續くか、目下世界の動向を正視する時、何人たりと雖も豫斷はさて置き、身の引き締る何物かを感じる。斯く觀察を下した時我等の覺悟新に體內に迸る。一脈の躍動を感じざるを得ない。然らば更に一般の緊張と志氣の昂揚、不斷の素養こそ百難突破の素地が涵養せられて、不死身の花々

四

しい戦闘も唯々諸々と遂行せられる。

此の緊迫せる内外の情勢下に廣東攻略一周年記念日を卜して、惠州城攻略當時を想起し、思ひ新に力戦の跡を偲び、死線を越えて壯絶極まる敵陣奪取慘憺たる苦闘の裡にも、明けやらぬ惠州城頭高く一番乗りに打ち樹てた日章旗は、朝風に飄り、流れ豊かな東江を眼下に見下し萬感盡きざる感激の場面、噫々此の一戦、此の情景、天龍正に廣東を呑み餘裕綽々として面目躍如たる我が將兵の奮闘史に一頁を飾り、死地に活を求めぬ貴き犠牲的精神の發露を披瀝し、狀勢下の認識を深める一端に供せん。

滿天隈なく冴ゆる月下、銀波に映る山姿も觀賞の追なく、空前の奇襲上陸を敢行牙々たる萬疊の山嶽を強行軍のぶつとほしに一睡も眠らず、牛江に於ける前衛部隊の小競合に眼を轉じつゝ十四日正午、早くも惠州西方五軒餘の地點に主力を集結、此の間將校斥候の報告に基き敵狀配備の狀態を知悉、作戰暫し部下將兵の意氣如何にと見れば、數日の船中生活にも取けず、二

晝夜連続の強行軍に疲勞の色だに見られず、旺盛なる意氣、さすが名にし負ふ九州健兒よと心竊かに喜び、戦はずして敵を呑み進撃命令下す時、正に午後四時、此の時に至り、我が海の荒鷲敵陣爆撃に急降下秘術を盡しての爆彈投下に前進を起す。峻嶮と天然の地形に近代武装を施せし敵陣攻防既に備りて、空陸一體の立體戦も秋の日の暮れ易く、宵闇迫る頃雨を染みし空模様は俄に落つる百雷の如く篠衝く雨は雷鳴凄く寸前識別困難の闇だ。

憶へば其の昔桶狭間の合戦に偉功を樹てし織田信長の奇計斯くやとうなづきつゝも天祐此處に至れり。暗夜の雨中戦機正に熟すれば、命令一下登る山嶽下る狭谷數線に亘るトーチカより射注ぐ彈雨の激しさ、譬へんに物なく、雨霽れたれど彈霰く一進一止肉迫戦の雄叫び山嶽を壓し、一大修羅場と化した高原の雜草も、から紅に勝鬨舉る萬歳の轟き、斯くて堅壁を誇る惠州城も僅かに數時間の内に脆くも掌中に歸せり。想へば奇策縱横の士と雖も何かはせん。鞏固なる團

結と一死報國の必勝の信念旺盛なればこそ、敢て水火も尙辭せざる部下の鐵石心に著しき戦果の獲得こそ又宜なる哉。況して長期建設下の現下歐洲波亂の現狀に



一隊部川鈴一リ踊盆善親支日

五



日安慰の士兵

鑑み、惠州攻略の既往を顧みて不撓不屈勇往邁進以て聖戰遂行の本義に則り、更に各人の發憤と努力を希望して止まぬ次第である。

懷想 (増城記)

六

大場隊 宇野英男

幾多の尊き日本魂を散華したる増城の山野。昏々と眠る英靈の面影何處へ、夏草生ひ茂る路傍の草蔭に、廣東軍の迷夢滅ぶ陣地の傍に、睥睨して立つ墓標の邊、攻略史の華咲き、生前の武勳を讃へ、鬼哭愁愁、胸に迫り、激戦を偲ばせる。

我、燕石嶺上に徘徊す。

東方遙か眺むれば、惠増間軍用路、坦々として戦雲孕む峠に消え、赤肌も露はに、敵、山嶽陣の羅列、屏風山の峻峻を仰ぐ。我等、百難を冒して敢然と征服せし鐵靴の跡、雜草の蔓跋扈するが儘に、蟲群、歌の宿たるか。

双眸を轉じて増城を指呼の間に俯瞰すれば、銀蛇の如き蜿蜒たる流れ、夏草劃る東江の水にして轉々荒寥たる感慨の邯鄲夢を追ひ彷徨ひぬ。

巨砲の咆吼、火を吐く輕重機の猛吠、荒鷲の猛爆、敵殲滅の喊聲、浮足立つ敵三軍の蠢動、追憶の魂懐しく、胸に甦る。

北に聳ゆる彼の山は、一番乗りの旗立てし山、岷々たる、あの山は、江南の刃を奮ひ、戦友の仇、報ぜし山。されど國破れて山河残ると、星霜遶り日章旗翻る山々は、大和民族の赤き血潮が流動し欣々として更生の民歸り、畑打つ鍬の光、平和な稔、水牛の群遊。おゝ増城の戦跡は今ぞ興亞の光に蘇る。

白耶土灣敵前上陸記

同人

全世界を震撼せしめたる南支、白耶土灣の奇襲敵前上陸、回想譜も新に意義深き日を再び茲に迎へんとす。

天佑か、早朝來の霧重く垂れ籠めて漁火の波間の彼方に浮び南支の海、極めて靜謐なり。我等攻略部隊の



一本校學業職子女東廣一遊娘姑る作を形人本日

七

意氣天冲、堂々と横はる無燈火の船團、吐く煙の薄黒く朧月に挑みかゝり、妖しく漠々たる戦雲漂ふ。時期到来か、忽然として起る發動機の唸り、噴霧を衝き白耶土の深夢は破られ行く。おい、愈々敵前上陸だ。我等腕を撫しつゝ遙か影黒すむ陸地を凝視す。信號彈は打ち上げらる。おゝ今ぞ抗日都廣東騰戀の火蓋は切られんとするのだ。見よ。見よ。白浪を蹴立て、進む魚雷の一隊を、勇猛果敢なる大和魂の突貫だ。我等息を呑み戦友の無血上陸を祈る事暫し。あつゝ信號彈が上つたぞ。上陸成功だ。燦然たる烽火、興亞の聖火と燃ゆる。皇軍萬歳だ。突如として一齊に艦砲射撃の火蓋は切られ、砲聲股々として曉の山野に轟ひ、敵を戦慄せしめ、艦艦殿として白耶土灣を威壓す。斯くして皇軍の疾風迅雷的進撃は開始されたのである。

〇〇場の戦闘

杉山 隊 平田 四侍

想ひ返して見れば夢の様であり人の話の様な気がする。我が隊が〇〇場入口へ着いたのは午後四時頃だった。其の時の人馬の疲労や辛苦は改めて此所に述べる事は止さう。其の頃はもう歩兵部隊は〇〇場へ入り猛烈な戦闘中であつた。生温い空気を震はして敵陣はヒューン／＼と我が隊の頭上をかすめる。暫らく息をつくと敵砲兵粉砕の命を受けた。あゝ其の瞬間胸に波立つを感じた。愈々生還を期せずと云ふ誓ひが腦裡に泉の如く湧いて来た。いつとはなく彼方は次第に暗く成りそれにつれて敵陣は愈々物凄く飛來する。間もなく我が隊の〇砲の火蓋は切つて落され、彼我兩軍の砲聲は股々として夕闇を無氣味に震動し始めた。

我が〇側方の警戒の任に當り、銃剣をかまへ乍ら固唾を呑んで敵方を監視し我を忘れて任務に當つてゐた。其の時我隊へ敵逆撃の報が傳つた。戦ひの度に最後だ、最後だ、と思ひ乍ら幸か、不幸か今日迄生きながらへて来たのだが、今度こそは生還を許さぬ好機到来だと、稻妻の如く胸を轟かす。暫し今迄の砲聲はいづ

こへやら一瞬にして静寂に歸つてゐた。我隊の正確無比の射撃にたへ兼ね〇〇方面へ急走したらしい。我が隊は敢へて追撃もせず現〇〇場で嚴戒裡に夜を徹し曉と共に出發行動を始め、目的地へ進撃を始めたが、昨夜の敵陣地へ差かゝると、憎い、否可哀想な支那兵が朱に染つて倒れてゐて、數日前からの陣地と見へて、軍帽だの、鐵兜だの、小銃彈だとか夜具等が亂雑極まりなく放擲されてゐて薪の燃え残りも一抹の哀れをとめて居る。

やがて我が隊は蜿々長蛇の如く山間の細道を目的地へと急いでゐた。心なしか馬の帶具も張切つて汗にぬれ、馬體も一段と威力を増して見へるのだつた。もう相當に來たであらうと思はれる頃には、四邊はすつかり夕闇が迫つて蟲や蛙の鳴く音でさへ寂として耳をつく。やがて幾度か山を登り谷を渡つて降り続いた雨に水を増した水田の細道を行つてゐたが、愈々泥濘で友軍の馬が一回、四肢を胸元迄でめり込ませて哀れにも首のみを打ち振り最後の名残りをおしむ様であつた。

夜は次第にふけて大陸の夜中の冷さは一入厳しく、空腹と疲れは一度に出て来て汗にぬれた戎衣を通してひし／＼と身體にこたへる。やがて名ばかりの宿營地、練瓦家に宿營する事になり、生木をこがす燃火に衣類の汗を乾し、次々に飯の準備も進み久しぶりに支那鶏の味に舌鼓を打つたが、空腹と疲れに其の味は又格別だつた。夜は深々とふけて最早三時を過ぎてゐた。雨戸に横になつた〇〇戦友と二人は昨夜の戦闘の話に夢中だつたが戦友は何時しか白河夜船だつた。故郷の夢か戦闘の夢でも追つてゐることだらう。

折から煉瓦壁の破れを通じて切西瓜の様な形をした三日月がボーツと不氣味に戦友の顔を照らしてゐる。何時しか我も深い眠りに落ちてゐた。

愛車と共に

本田 隊 坂本 五平

早いものだ。我等が有史以來類例のない戦果をおさ

めたバイヤス灣の奇襲敵前上陸成功以來一周年とは恐らく我等南支派遣軍に取つて永久に忘却出来ない感激であるだらう。又續いて神速果敢なる廣東入城迄も人間業とは思へぬ程だ。我も亦此の波亂萬丈の一周年を追想して轉々感慨無量の至りだ。入城當時の子一人通らぬ程の廣東も目抜通りの如きは事變前にも増す繁華を極めて居る。此の輝やかしき皇軍の足跡の影に幾多の戰没勇士と人間にもおとらぬ我等をして號泣暗涙をほしきまゝにさせた忠馬、忠犬の尊い機性を忘れる事は出来ぬ。雨につけ風につけ思ひ起すは是等戰死勇士の事だ。此處に意義ある一周年記念を迎ふるに當り諸君と共に勇士の瞑福を謹んで祈らん。

我等は兵站自動車部隊として科學的輸送能力を發揮、澳頭港より廣東迄ながら灰の中を走る如き物凄い砂煙の中を、日夜奮闘して居る當時の事だ。何分山嶽多き此のコース。橋なども澤山あつたのだ。これが敗残兵の燒却を防止すべく橋毎に歩兵一個小隊位づつこれが警備に任じて居たのだ。當時我が中隊も一個小

隊程これが警備隊配屬として隨所に勤務にたづさはつて居たのは昨年の晩秋十一月も暮れなんとする頃の事だ。惠州西南方十軒地點に某警備隊が橋梁守備に任じて居た。此の隊の配屬になつて惠州方面の連絡や輸送任務に完璧を期しつゝあつたのが松澤幹雄、田中久、宮本明、橋本傳次郎の四勇士だつた。十一月二十三日午前二時頃と聞く。勇士も終日の激務にて眠氣を覺えし頃突如山上より敵が機關銃小銃を三方より目茶苦茶に射出した。敵は我が警備隊の存在を目測して居た如く集中射撃だ。不意の敵襲とは言へ音に聞へた〇〇警備隊だ、悠々と部所に付いて隊長の命令を待った。

三方よりの限りなき一齊射撃は隊長以下をして數千の敵兵と判断せしめたのだつた。到底此のまゝでは全滅は火を見るよりも明らかだ。

之が連絡と援隊を命ぜられたのが操縦手松澤幹雄、助手田中久兩勇士だ。松澤は音に聞へた命知らずの信州健兒、田中は江戸子、共に關東男子の中にも星に櫻の帽章を誇りとする勇士だ。

勇躍此の重任を受けた此の夜は一天さながら墨を流したる如く文字通り一寸先も譯らぬ眞の闇。小數の警備員と共に深夜を突いて出發したものゝ、一軒も來た頃だ突如として真正面前方百米地點に起る機關銃の集中射撃。敵は我が自動車の來るを知り待期して居たのだつた。自動車が夜間有燈火行進で前照燈をねらはれたら運の盡きた。絶対に逃れる事は出来ぬのだ。松澤勇士は頭部胸部に、田中勇士は胸部足部に共に數彈を受けてしまつた。松澤操縦手の氣力が衰へると共に自動車も停止した。何分身體中赤誠を以て燃ゆるが如き兩勇士故自分の身體など眼中にない如く一途に任務の挫折を苦しんだ。然し此のまゝでは敵の襲來は時を移さずあるに違ひない。命よりも尊い自動車兵器、ネヂ

の一箇銃の一本迄が同胞一億民衆の血と汗を一丸となし畏れ多くも 陛下より下し置かれたをむさむさ敵に奪はるゝ事は死よりも辛い苦痛だつた。

愛國の至情燃ゆるが如き彼等は愛車と死を共にすべく決意した。

轟然たる爆音は邊りの静寂を破り焔は天をこがさんばかり、遂に愛車の自爆が決行された。

愛車と共に壯烈南支戦線に散華、皇軍の眞面目を發揮せし兩勇士の處置こそげに皇軍の龜鑑で無くて何ぞ。

此の報内地に傳はるや畏れ多くも上聞に送達したとか洩れ承まはる。國民の感激は語る迄もない。今は地下に安らかに眠れる兩勇士の満足や如何ばかりであらう。

網膜の映像 (メモの中より)

濶田部隊 小野路 三

聖戰に今日ぞ門出や菊日和

……有家君に會ふ。今日わざ／＼中津から見送りに來て呉れたのだつた。奥さんからの白酒をいたゞく。部隊は岸壁に向つて前進を始める。兄が來る。話をする暇もない。乗船開始。船室に装具を解いて直に甲板

に出る。舷側には既に兵隊が隙間もなく立ち並んで、見送りの群集に交つた肉親や知己に向つて、旗を振つたり何事か叫んだりしてゐる。安川分隊長が手招きをする。何んな用事かと思つて行くと、

『あなたの友人があすここに居ますよ』

と、指差す。旗と人どで埋め盡された岸壁の丁度真向ひに、兄と有家君とが並んでゐる。私は手を舉げた。直ぐ兄も有家君も小旗を振つて合圖をする。幾百幾千とも数知れぬ顔の中から、兄と有家君の顔が明瞭にクローズアップされる。

兄が笑つてゐる。有家君も笑つて居る。私は手を振つて應へる。悉別れだと思ふと聞えないのを知り乍ら、何か知ら別れの辭を叫び度くてならない。と、急に熱いものが胸に込み上げて来る。兄の顔も有家君の顔も、ビントがぼやけて了ふ。涙が溢れさうになる。私は堪えられなくなつて船室に駆け込んだ。そして兄から貰つたウイスキーを立て続けにあほり、やつと元氣を取り戻して再び甲板に出る。急に居なくなつた私を探し

てゐる兄達の視線を捕える事が出来た。軍歌に合せて旗が波を打つ。歓聲が渦巻く、聲々……、昂奮した絶叫の中に女學生のバンドが、正しく愛國行進曲のリズムを傳えて来る。

送るものも、送らるものも、總てを忘れて互に昂奮に歪んだ笑顔を向け合つてゐる。此中の何分の一かの人々は再び相見する時はないのだ。それが誰であるか、神より他に知るものはない。だから人々は皆最悪の場合を豫想して、是を一生の袂別と思つてゐる。兵隊は家庭も、事業も恩愛も、あらゆる執着を断ち切つて、只管祖國を守る楯となり、異境の山野に潔く死んで行く自己の運命に、無上の光榮と感激とを覚える。反省とか、思索とか、そんな事は超越して、唯命を投げ出して奉公の大任を果す事、それ丈の信念があるのみである。

甚だ單純である。だから純粹である。人間の心を是程迄に純粹にする事の出来得る、日本と云ふ國家の持つ驚く可き偉大な力！ 建國以來、それは愛國心と呼

一年を想ふ

潮田部隊本部 石川 博 瑞

ばれ、又大和魂と言はれる不思議な力！ 此方に總てを委ね盡して、死の刹那、唯一無二の心境に萬歳を叫ぶ。祖國を愛する心！ それは世界を、人類を愛する、大いなる神の心に等しいものである。

ドラが鳴る、船は静に動き初めた。船と陸と同時に起る軍歌の合唱の中に、袂別の辭が、激動の辭が、咽喉も裂けよと叫び交される。昂奮と感激の最後の瞬間、徐々に遠ざかり行く顔、見なれた兄や有家君の顔を今更のやうに貪り見る。船の速力が加るに従つて、岸壁から遠く離れても未だ兵隊は立ち去らうともしない。やがては、旗も、顔も、只混屯として、區別も出来ない程に遠退いても、兵隊は尚ほも舷側に立ち盡して、網膜に焼き付いた映像に向つて、別れを惜んでゐる。戰場に在る限り、命のある限り、雨の日も、風の日も、此の網膜の映像は何時迄もく、決して消えることはないだらう……。

「オイあの時は辛かつたなあ」一杯呑むと戦友がよくこう切り出す。「こんな酒を呑もうとは思はなかつた」と舌鼓を打つてゐる。こんな話を聞いてゐた自分は不圓月明のバイアス灣に敵前上陸してより、廣東入城迄の苦しかつたが然し楽しい思ひ出となつた當時の色々の事を思出す。未経験の酷暑の中にての作業、一物も残さず灼き盡す如く照らす太陽はあの時程うらめしく思つた事はなかつた。内地のお百姓さんが早天で睨む太陽と又別な意味で空を見上げた。

降れば泥濘照れば黄塵と兩者いつれを取るも苦難の一事につきたものだつた。

瀧なす汗は戎衣を濡し、水を求むれど泉なく、食を漁るに米なく、泥水を濾しては煮沸し、島の芋を嚼ちつて進んだあの時、人生の苦難の最高を行き肉體の最

酷使をなしてやつと辿り着いた廣東。キャラバンが常に望んでゐたオアシスの様に思はれた廣東。苦しかった色々の事が夢の様な楽しい思ひ出と變つた廣東……この荒廢の都を今の状態に復をせるに又如何に苦しんだか。

して見れば南支に於ける皇軍は更生廣東の生みの親と自惚れて見たい様な氣もする。又刻々魅る廣東の姿を見れば吾が子の成長を楽しむ様な嬉しい氣がしてならぬ。育て廣東！ 伸びよ廣東！ 皇軍が入城して早や一年にならうとする今日。皇軍の手で刻々と健全に發育する廣東の姿は頼もしい限りであり、又色々改革の事等思はれてならぬ。

『入城當時の惠愛路等は淋しいものだったよ、白晝一人歩きも何か氣味悪い様だったからな』と酒に上氣嫌の戦友が思出の絲を辿つて苦しかったが楽しい思出話をしてゐる。

中山記念塔の肩に丸い月が上つた。

夢!!

妹よ!! 斯く呼べば昨夜の夢まさしくと深ぶ

一人淋しく吾が家の軒端に立ちて

流るゝ雲に思ひ乗せてかちつと見詰めぬし

あの瞳 あの眉

吾征きて只一人雄々しくも留守を守りて

吾が勤まつと四角なる小さき便り來たりぬ

内送の戦友を送りて

内送の友と語れり様々と共に越えたる幾山川

握手せし兩の手に落つ涙強く握り別れぬ

別れ來て握手せし手を見詰つゝ歸りし友の白衣儼べり

白衣の目に残り淋しくも立てり病院の前午後の木陰

窓邊に肩並べちつと見詰めた二人の手

銃 ★ 後

慰問運動會開催

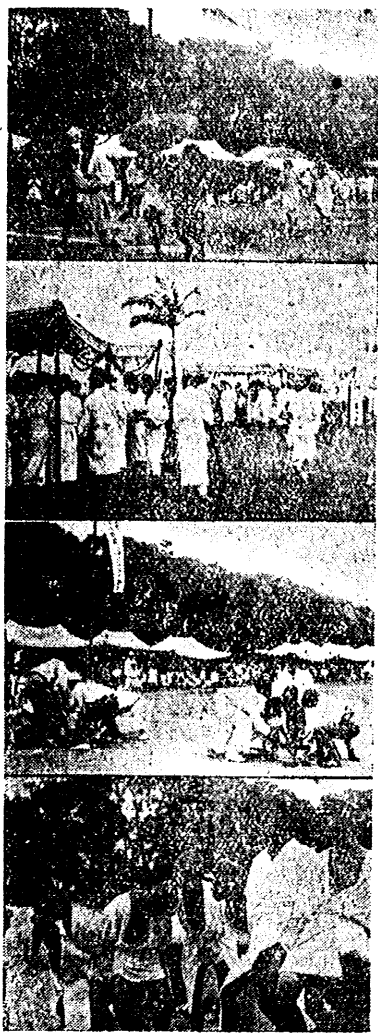
總督官房會計課

去る十月一日、總督官房會計課では、来るべき銃後後援強化週間に先驅して、この月の興亞奉公日を意義あらしむべく、陸軍病院〇〇分院に療養中の傷病勇士竝に、同課關係應召軍人家族を招待して、北投運動場に盛大なる慰問運動會を開催した。

同課では數日前より課員を數班に割當て、退願後や夜分に準備一切を整へ、當日は公務を有する少數名を除き殆んど全員が早朝より出勤、觀覽席や競技場の設備、放送の装置、模範店の仕度等、準備萬端を終つた頃には、前日より氣遣はれてゐた時雨模様秋空も多少の風こそあれ、雲が切れて次第に青空が見えはじめ、暑からず寒からずの絶好の運動會日和となつた。

九時少し前鐵道部の好意による臨時列車が新北投に着くと、手分けしてそれぞれ自宅まで案内に赴いた接待係に導かれた應召軍人家族が三々五々嬉々として會場に集つてくる。程なく、再起奉公の熱情を靜かに白衣に包んだ勇士達が、満場の拍手を浴びて入場、招待席天幕に入るのを待つて直に開會。劈頭會計課音楽部員の奏する國歌の奏樂裡に國旗の掲揚、戦歿將士の英靈に對する敬虔なる黙禱、次いで佐々波會計課長の開會の挨拶、招待軍人代表の謝辭があつて、恰度定刻九時三十分、愈々運動競技に移つた。

競技班が練りに練つて編成した番組の數々には、走るもあり跳ぶもあり揃ふもあり、中には思ひもかけぬ



てつぶおをや坊一争競ム一ホト一キス
るけかし押に店擬模…てしまソラバ
争競火點…み獨うせど…群の士勇衣白

逆立があり、また特に歩行の困難な傷痍の勇士や足弱の婦人達のために、蔦介石叩き、お多福競技があり、子供達には旗取りどぜう掴みなど、悉く趣向を凝らした珍競技揃ひで、プログラムの進むにつれて、會場の半周を圍む観覧席から哄笑爆笑の渦がまき起る。大陸の山河に群がる支那兵を畏怖せしめた荒武者も、銃後の家族や子供達に混つて今日一日は童心に返つてみな大ハリキリにはしやぎ廻はる。

午前中約十番が進み、放送係が中間餘興として總督府幼稚園々兒の童謡舞踊を報ずれば、観客の勇士や家

族はあどけない幼兒達の可憐な遊技を想像してゐると、愛國行進曲と共に歩武堂々と現れ出た男女の青年課員の一群にみんな唖然となる。やがてスピードカーから流れ出る「兵隊さんよありがたう」の童謡につれて手並み足並み揃へて踊り出すと、さす手ひく手も鮮やかな案外な出来栄に、「こんな大きな幼稚園々兒があるかい」と哄笑の渦は、一轉して拍手喝采となつて波のやうに天幕を傳はつてゆく。

この頃から天候や、悪化して大屯の連山は雨雲にかくれ、驟雨となつてきたが、餘興が終ると同時に晝食

のために一旦休憩とし、模擬店を開店すると前以て配付した模擬店券を持つて逸早く雨の中を飛出してゆく勇士もある。間もなく雨も止み再び空が見え出すと、辨當、おでん、しるこ、うどん、そばの各店は勇士や家族で黒山の人だかり、模擬店班に應援の女子課員は汗だくで接待に大奮である。「鹽梅は如何ですか」と兵隊さんに聞いてみると、「いやア、ステキです」と、ニコニコ笑ふ。粗末な接待にもさう言はれると係員はやつぱり嬉しい、忙しい中にニコニコする。みんなニコニコしながら食事が済んで、ホッと一息するうちに休憩時間が終る。

午後一時再開、トップは「蔦介石叩き」で、目隠しをして木刀で蔦介石人形を叩く競技、エイツと木刀を打ち下すと石油罐がガーンと鳴る仕掛けに、それ蔦介石が泣いた、と言つて勇士達は大喜びで手を叩く。中には、「我々は蔦のためにこんなになつたのだから、一遍だけと言はず思ふ存分叩かせて下さい」とわざ／＼係員席まで申出る松葉杖の兵隊さんもあり、係員も笑ひの中に思はずホロリとする。

午前同様傷痍勇士と家族を主に、時折課員男女も加はつて、午後の部の十五六の競技が競技班懸命の努力に遅滞なく進行する。どぜう掴みにたらひ中を掻き廻はしてはしやぐ家族の婦人や子供達、スピードホーム競走に若い女性の手を執つて戦友の拍手を浴びながら相手を崩す勇士たち。——その間同課幹部並接待班は接待幹旋に、放送班はアナウンスと奏樂に、寫眞班は場内を縦横に駆け廻ぐつてスナップに、それ／＼大活躍をする。

かくて病院組對會計課組の對抗バスケットボールを結びとして、午後四時豫定のプログラムを全部終了し、全員再び集會、國旗降下、佐々波課長の閉會の辭があり、最後に我が大日本帝國の萬歳を三唱して茲に銃後の感謝を表はす主催側の意は充分に盡くされ、終始和氣満々の裡に大成功を収めて幕を閉じた。

尙この傷痍勇士慰問運動會は、應召軍人家族慰安演藝會と共に、今次事變勃發以來同課の重要年中行事の一となつてゐるもので、昨年も十月初旬その第一回を開催して多大の好評を博したものである。

島都の銃後援護の姿

總督府情報部

昨年の十月三日 聖上陛下には、時の内閣總理大臣

近衛文麿公を召され「軍人援護に關する勅語」を賜はると共に御内帑金三百萬圓を御下賜あつた事は、軍人、軍屬は申すに及ばず、銃後の一般國民までも深く聖旨の有難さに感激且感泣を禁じ得なかつた處である。爾來早くも一年、然も支那事變は尙繼續中であるのみならず、興亞の聖業に迄進展を見て居り、他面歐洲に於ける動亂の波及面は愈々擴大されるべく見られ、朝にして夕を測られぬ實情にあり、軍人援護事業の多々益々重要なるを得せねばならぬ時である。廣東攻略一周年を記念する此の日此の秋、國民が一律に感謝の意をこめつゝ、各般の援護に當るのには洵に意

義深い事である。

軍人援護の事は多く説く迄もなく銃後國民の義務であり、延いては皇軍の士氣にも關し、且大和魂の育成上にも相當に深い關係を持つものとして、先づ、その精神上の効果につき十分の省察と考慮とを重ねるべきである。帝國軍人として一身一家を顧みず國難に赴き、その本義を盡すは固より是れ國民最高の義務であり、併せて日本男子としての本懐に相違ないが、此の貴い義務に勇躍する軍人に對し、銃後にある吾等國民亦その後援に最善を盡すのは當然の義務でなければならぬ。夫を護國の神の列に送つた妻が、父なき子を抱いて今後の長い年月を子女の撫育と教養とに努めねば

ならぬと云ふ事態を考へても、軍人援護の仕事は、實に今後長きに亘り、精魂こめて方策を樹て、行かねばならぬ國家社會の重大事業たる事を識るのである。子供たちの口から「兵隊さん有難う」の歌謡が聴かれる丈でも、それが赤誠こもるものである限り、士氣は振作するのである。生命を捧げて國民最高の義務に邁進する皇軍將兵に對し、銃後國民が何として感奮興起せず居られようか。即ち 聖旨を奉體し、出征軍人の家族を扶け遺家族に對しては、深く同情慰安に努め、併せて忠靈の顯彰に留意し、その靈を通して大和魂の練成に努力、皇國の精華を世界に發揚せしめる事に意を致さねばならぬであらう。尙これ等が、單なる行事に走り、精神や魂の入れぬものであつては意味をなさぬ次第であるから、この點深く留意し凡て至誠を以て一貫するの熱意を徹さねばならぬ。

興亞の第三秋、身も心も總力戦にひきしまる島都の銃後援護強化週間は十月三日より力強く始つた。「銃もついで銃後に盡せ」全島一齊に立てられた日の

御旗も國民の覺悟に新しい緊張味を加へる。

今こゝに島都一週間の實施事項についてのべて見よう。

實施事項

一、勅語捧讀

興亞の秋！三日より九日迄は、長くも國民に賜りたる軍人援護に關する勅語の大御心に副ひ奉る意義特に深き週間である。

この日總督府を初め、各官衙、學校、團體その他重なる會社、銀行では、朝禮其他、適當な機會を撰び、勅語を捧讀し 聖旨の存する處を一層深く服膺し、有意義且嚴肅なる週間のトップを切つたのである。

二、慰靈、祈願祭舉行

「讃へよ功績 忘るな援護」

全國民が擧つて、勇士や遺家族を守り愈々完璧の興亞陣を堅めて居る時、今次事變に尊き護國の華と散つた在天の英靈を慰むる嶺北州主催の慰靈祭は、

三日午前十時半より臺北市新公園で執行された。照らす降らず、秋色酣なる新公園の草木も忠魂に感謝し、哀悼の意を表するの誠意をこめてか、枝も鳴らさぬ祭場。芝生を埋めつくす一万余名の市民の心は、はるか靖國神社に神鎮まります諸英靈をしのびて肅然と聲なく、宏大なる民族の感謝をささげつくれたのである。

又島都の神社、寺院に於ては、夫々武運長久、傷痍軍人平安祈願祭が催され、大陸に勇戦する夫、傷つき或は斃れた父を、兄を、友をしのんで感慨新なる遺族をはじめ、官衙、學校、諸會社、團體參拜者の群が終日つき、正午には、各自所在の場所に於て、心からの祈りをささげ、家に、職場に、巷に、ひねもす敬虔な日を送つたのである。

最愛の肉親を戦線に送つた輝く興亞の兵の家を護るべく、事變以來臺北市各方面に於ても極力、努めて來つたが、今回、臺北市出征軍人後援會では、こ

の意義深き週間中の行事として五日午後二時城西技藝指導所の終了式を挙げた。

此等終了生は、何れも習得した技術を生かして同所授産部の職場に働いて居り、その他の人々もすべて雄々しく我家を守つてゐるのである。

四、傷痍軍人慰問座談會

「忠義の盾に援護が宿る」
四日午前九時から草山樂園に於て臺北市主催の傷痍軍人座談會が開催された。日清・日露・日獨、各戦役、北清・シベリヤ・滿洲、各事變並に今次事變に従つて我が國半世紀間躍進の歴史のかけに身を以て尊き體驗を経た勇士多数が出席し、往時を懐古しつゝ、武勇談に、戦友の思ひ出に、日本の將來を憂へる至情に様々な話を過ぎした後、盛澤山の餘興に一同のびやかに寛ひたのである。

五、出征軍人遺族座談會

臺北市出征軍人後援會では五日午後二時より、公會堂に於て遺家族座談會を開催、力強くも雄々しき

日本の母や妻達があつてこそ、日本の兵隊はかくも強いのだと、感慨新なるものがあつた。
以上挙げたものは一例に過ぎず、白衣の勇士を慰問し、或ひは戦場を馳騁する勇士に温き慰問袋、慰問文を送り、或ひは遺家族の慰安に遺憾なき銃後々援振り

を發揮し、他方目披の場所に、銀バスの後にあまねく感謝のポスターは見受けられ市民の心に一層深き感謝報恩の念を植えつけ、終始緊張した週間を終へたのである。

全臺灣學校皇軍慰問取扱狀況

文 教 局 學 務 課

(直轄學校、州、廳六月分)	
慰問袋	五、二五三筒
此の見積金額	一〇、七九三圓四五錢
其の他の品	
慰問文	四五、一〇七通
新 聞	
雜誌	三三三部
雜 誌	三九一部
此の價格	六八一圓〇五錢
現 金	一七九圓〇五錢
六月分慰問金品總金額	一一、六五三圓五五錢
	(現金を含む)

直轄學校、州、廳取扱状況累計

自昭和十三年六月
至昭和十四年六月

慰問袋	六七、八一箇	刺繍入ハンカチ	三二四枚
此の見積金額	一三七、六九五圓三六錢	新聞	三四九〇部
其の他の品		雜誌	七、四七三部
果物料寄贈	一七〇圓	運動具	一二六圓五〇錢
慰問文	一二六、六八七通	娛樂用品	三七九圓一〇錢
兒童慰問文	一四、一四〇部	食糧品	一三〇圓五〇錢
扇子	六、〇〇〇本	此の價格	一三、三〇一圓三八錢
圖畫、寫真	五、三八八枚	現金	一、五〇六圓九三錢
日の丸録卷	一、二六〇筋	慰問金品總計金額	一五二、五〇三圓六七錢
内			
譯			

文 教 局	慰問袋	見積金額	其の他		計
			現金	現金	
臺北帝國大學	1	1	1	1	1
			3,033.05	1,648.87	

臺北高等商業學校	五〇	七〇〇〇	現金	六〇四・五
臺南高等工業學校	二二五	四二七・〇〇	現金	一一五・〇〇
臺北高等學校	二八五	五七九・九〇		
臺北第一師範學校	六七〇	一、〇四三・七三	慰問文	一、一〇三
臺北第二師範學校	四七八	九六五・七七		
臺中師範學校	二八〇	五八〇・〇〇		
臺南師範學校	三四五	六五四・〇〇		
臺北州	一五、四六六	三三、一七二・四四	録卷	五、四一、二六〇
新竹州	九、七四六	一九、九六八・三七	圖畫	二、七九、四六〇
臺中州	一四、三九五	三三、三〇三・〇二	圖畫	六、七、四六
臺南州	一〇、一〇一	二四、一二九・五〇	刺繍入ハンカチ	一、八、三一六
高雄州	一一、七三六	一九、三七〇・六一	刺繍入ハンカチ	一、三、〇〇〇
臺東廳	五八三	一、〇一七・九八	刺繍入ハンカチ	一、三、〇〇〇
花蓮廳	二、八二九	三、四二五・九四	刺繍入ハンカチ	一、三、〇〇〇
澎湖廳	六三三	九九七・一〇	刺繍入ハンカチ	一、三、〇〇〇
			日の丸録卷	一、二、四四六
			雜子	七、〇、四〇〇
			雜子	三、〇、四〇〇
			雜子	一、二、四四六
			雜子	一、九、四五六
			雜子	七、六、九
			雜子	四、三、六九
			雜子	四、三、五
			雜子	四、三、五

内外新聞論調

二四

△和平絶望の歐洲政局 (十五)

讀賣

歐洲はもはや避け難き最悪の事態に直面し、戦争の責任はヴェルサイユ體制を固執して、獨に不當な壓迫を加へた英佛の政策が戦争誘致の根本的な原因となつたことにあるが、この程を排除するために開つたヒトラー總統の政策にも遺憾の點が少くなかつた。ヒトラー總統はポーランド攻略完了といふ既成事實の上に立つて、外交工作を進めようとなつた。従つてこれに呼應して調停に立つ國はなかつた。

愈々戦争が本格的な展開を見ると、ソ聯が決定的なドイツの味方となり得るや否や、甚だ疑問であり、ソ聯外交政策

の基調として、交戦國のいづれにも味方せずといふ漁夫の利にあると見るからである。イタリーの態度に至つては出来るだけ中立的立場の維持に努めるものと見るのが妥當であらう。アメリカは英佛との間に緊密な關係があるから英佛の味方として参戦する可能性なしとしない。

支那問題に於てわが國と對立する英佛が歐洲戰線の渦中にあるから國民はこれが推移を注意し、國家の進路にあやまらざることを期す。

△ソ聯と支那共産黨 (十五)

大朝

支那事變がソ聯の世界政策を背景とし、共産黨の策動によつて國共再合作となり、事端發生となつたが、兩者は矛盾を包んだまゝ、相互の利用價値を

△英國獨の提議を拒否す

大毎

チェンバレン首相の見解に依ればヒトラーの平和提案は「單に征服の事實及被征服者に對し、思ふままに振舞はんとする權利の承認に過ぎぬ」といふのである。ドイツ現政権が眞に英佛との平和を欲するならば、ドイツは先づポーランドにチエツコスロバキヤを、侵略以前の狀態に復すべきであると主張してゐる。ヒトラーも英佛が獨の平和提議を拒否すれば斷乎決戦すると聲明し逼迫せる情勢に迫り込み歐洲戦争はいよいよ本格的な舞臺に突入した。

△日ソ停戦協定成立を歓迎

獨逸

九月十六日伯林各紙はモスクワ發DNB通信として、十五日の滿蒙國境事件解決に關する日ソ協定成立を報ずると共に其の内容を掲載し、何れも大いに之を歓迎し居る旨を記載してゐるが、その内ポエルセン・ツァイツングは「ドイツは兩國が何れもドイツの友邦であるから、今回の協定成立に満足の色を表するの云ふまでもない。殊に日ソ間の外交戦と武力抗争に依り利益を受けたのは英國であるとの、政治的認識に基いて締結を見たのは喜ばしい次第である。さきに獨・ソ不可侵條約に依り不意を打たれた英國は今又日ソ協定成立の報に接し、又スマターニンの駐日大使任命の事實により、兩國政府に、日ソ關係調整の意思ある事を知り再び驚愕を喫したのであらう」と論じ、ドイツ・ツァイツングは「ツァイツングは「日ソ協定成立は、極東政治のみならず、世界政治上極めて重大なる意義を有する。最近の日本内閣の更迭はその理由の一として、日ソ國交調整

の政策實行を容易ならしめようとの意圖のあつた事を窺ひ知るべく、阿部首相は遂にその目的を實現したが、東郷大使の功績亦大なるものがあり、日ソ協定の意義は日本の極東に於ける新秩序建設の意圖及世界政策上の大なる見地より之を解さねばならない。ソ聯が、援將政策を擁護し其の結果、英國が極東に於て更に大きな打撃を蒙るに至るべき事を期して待つべし云々」と論じた。

△ソ聯のポーランド進駐に全幅の賛意

ソ聯軍の東部ポーランド進駐に關する九月十八日朝刊伯林各紙の論調は左の通り。

(「フェルキツンジャー・ベオバハター紙」)

「吾人はソ領ウクライナ及白露に東部ポーランドの同族ウクライナ及白露人を結合せんとするソ聯の決意に對し全幅の賛意を表し歓迎する。客年より本年に互り中歐の事態はヒトラーの力に依り安定せられたが、之と同様に東歐にも亦明確なる恒久的狀態を設定しなければならぬ。

英國をして其の權勢をほし、いまにせしめる爲、歐洲大陸の危險と不安の原因たる人工的傷口をその儘放置すべきではない。」

(半官治外交通信)

「西部ポーランドの獨逸民族と同様東部ポーランドのウクライナ人及白露人は二十年間のポーランドの迫害の下に呻吟して來たが今回同地方に流入したポーランド敗殘兵の爲之等數百萬の民族はその苦惱を倍加した。ソ聯軍の東部ポーランド進駐は同地方の大混亂を未然に防止せんとしたのに外ならない。」

(「フランクフルター・ツァイトウング紙」)

「ソ聯軍のポーランド進駐により、世界政治上極めて重要な一事實が茲に實現された。二週前迄モスクワに軍事委員を派遣しソ軍の對獨進撃を調整した英國は九月十七日を機起しき日と感したの疑ない。今後の事態の發展は豫測し難いが、少くとも暴力國家ポーランドが再び起つ能はざるは疑を容れない云々」

△英佛よ、ム首相の言を傾聴せよ

二五

九月二十三日ムツソリニ首相の演説に
關し、二十四日フェルキツシャー・ペオ
バハター紙は左の如く論じた。

「ム首相が数箇月來の沈黙を破つた
のには二つの理由がある。一つは伊國民
が時局進展の推移を注視してゐること、
二は英佛がムツソリニの言を傾聴するに
於ては、現下の時局は平和の時たり得る
ことを示さんとしたものだ。右演説中注
目すべき點はムツソリニがポーランドが
以前の形に於ては復活し得ざる事を明か
にし、英佛が一方に於てドイツのポーラ
ンド攻略をなげき乍ら、他方ソ聯軍のポ
ーランド進駐には何等禍るゝ所なく即ち
矛盾した二重政策を執つた事を非難した
ものである。

ムツソリニは過去四年間に於けると同
様力と冷靜を以て不動の政策を實行して
居ること及歐洲時局に對する伊國の大な
る責任を自覺して居る事を明示したが、
ムツソリニの示した所を模範として之に
倣ふべきである。或國の爲さんとするが
如き歐洲交戦國に武器を供給し以て自國
の失業救済に資せんとするは畢竟戰爭を

長引かせるもので、ムツソリニの到底考
へ及ばざる處である云々」

△日ソ停戦協定と民主々 義國家

「伊太利」イニフォルマチオニ・デル
チオルノ紙は九月十六日の同紙に於て日
ソ停戦協定を論じ、右協定が今後世界平
和に暗示した顯著なる功績は没すべから
ざるものがあるとした。その要旨は左の
通りである。

「今回の日ソ停戦協定は列強に對し、
秘密裡に運ばれたものであるが、之は半
永久的に續くであらうとみられた日ソ間
の紛争に明瞭なる結果を與へたものであ
る。此の協定は局部的なものであるが、
日ソ間の全般的關係にも今後次第に良好
な影響を與へ日ソ間に平和關係再建に役
立つものなる事は附隨的情報によつても
充分窺ひ知られる。右協定に對しドイツ
が満足し喜んでゐる事は注目し値する
は云へ、之に依つて日本は今迄執り來つ
たその政策を今更變更はせぬだらう。併

し本停戦協定が今後日本が極東に於ける
權益を擁護し發展をはかる爲に大いに有
利なるは明白である。獨ソ不可侵條約締
結後世界の新聞は日本の政策の變更必須
なりとし、民主々義國家は之を自國側に
有利に宣傳したが、事實は明白に日本の
立場を證明してゐる。今次の協定が世界
平和の爲與へ日暗示した顯著な貢獻は注
目されねばならぬ。」

△英佛の對ソ戰爭回避は 不可能

九月二十二日ボ・ロ・デイタリア紙は再
び無署名の社説を掲載し歐洲戰爭が無益
の流血沙汰だとの趣旨を繰返したが要旨
は左の通りである。

「ロシアがポーランド問題に武力介入
を取つた事は極めて重大な新事實と云
はねばならぬ。獨ソ兩國が國境を接する
事は兩國の協力よりも兩國の紛争を惹起
する危険性を多分に持つこととならう。
夫れは兎も角としてソ聯がポーランドに
侵入したのだからソ聯も英佛の敵となる
わけである。英佛がポーランドを原狀に

復し、ヒットラー主義を破壊する迄には
數百萬の人命の犠牲を覚悟せねばなら
ぬ。そして假令聯合軍がジクフアード
線を突破し柏林に進み得たとしても更に
シヤと戦はねばポーランドを回復する事
は出来ぬこととなる。ナポレオンより幸
運にして、より天才的な人が出れば斯る
ことが達成されるものではない。聯合軍

がドイツと丈戦ひポーランドと同じく侵
入したソ聯とは戦はぬ等と云ふ事は出来
るものではない。聯合國側はジクフア
ード線を難攻不落の鐵壁であり、又それ
が同時にドイツ民族の西へ進む限度であ
る事は是非共理解すべきであると信じ
る。」

て餘興に移り、後園遊會に入り一同
中部平野を一時のうちに眺めつゝ歡
を盡し最後に帝國萬歳新高港萬歳を
三唱して散會した。



新高港築港 起工大祝賀會

〔臺中州臨時情報部〕新高港の築
港起工祝賀會は九月二十五日正午大
肚山展望臺に於て小林總督臨場の下
に盛大に開催された、一同着席する

や松岡知事登壇して新高港築港に對
し督府當局の英斷を感謝し、築港完
成の曉に於ける禮讃と州民の進捗に
協力するを希望する所あり、これに
對して小林總督は列席の來賓を代表
して先づ新高港命名の趣意と之に對
する覺悟を促して祝詞となし、終つ

〔同部〕大日本傷痍軍人副會長和
波豊一中將を迎へて開かれた臺中州
下在任傷痍軍人懇談會は九月二十七
日教化會館に於て松岡知事、和波中
將、天岩州教育課長、石川州社
會事業主事、二瓶、横澤兩中佐、伏田
○〇病院長列席の下に開催、出席傷
痍軍人は臺中市井川彌三郎氏外○
名であつた、一同 皇居遙拜の後歡
譁を捧げ、次で松岡知事は挨拶後座
長席に着き忌憚なき懇談意見の交換
を行ひ和波中將の傷痍軍人の覺悟に

つき講話を拜聴同零時十分散會し午餐を共にし、それより臺中座の觀劇會に出席した。

烏溪治水工事竣工式

〔同部〕 内務局の直營事業として昭和六年より九箇年を経過し、工費五百七十五萬圓を投じた烏溪治水工事は一部の補助工事を除き此程大部分竣工を告ぐるに至つたので、十日臺中公園に於て竣工式並に祝賀會を舉行した。該工事は大屯、彰化、大甲、南投の四郡及臺中、彰化兩市に涉り石堤の延長二萬一千八百米、上堤の延長二萬五千五百米、實に一里に及ぶ大工事で森技師同工事業務長として當初より今日に至つたのである。

臺中市慰問品展覽會

〔同部〕 豫てより準備中であつた臺中商工會議所主催の報國ボスター及慰問品展覽會は十月三日の軍事援護強化週間を第一日とし五日間に互り市公會堂及商工獎勵館に開催されたが今回の展覽會は州市及臺灣新聞社を始め州國防養會、軍事扶助會等の後援の外特に軍部の絶大な援助を得頗る人氣を集め觀衆殺到を呈した。更に會期中は貴重な軍部貸下の戦線映畫を公開、尙ほ個人の便を計り場内に郵便局出張所を設けて慰問品小包も受け付けこれまた相當な成績を挙げた。

母を車上に曉の参拜

〔同部〕 約二箇月前から毎日缺かさず午前五時頃何處かの本島人の婆さんが自家用の人力車で臺中神社に到り社頭に額き皇恩に感泣しつゝ、恭しく参拜するので同社司を始め一同が感激してゐるが、この主は臺中市錦町金豆商店主施豆(會三)の母(六)で車引は施豆君である、施豆君は鹿港生れで幼時父を失ひ母と共に貧困なる生活に苦闘を續け二十三歳の時臺中に来り僅かに鶏賣買をなし奮闘の結果今日の成功を見堂々たる店舗を經營する至つたのであるが、之れ全く廣大無邊の 皇恩の賜として感謝し参拜を續けてゐるのである。

高雄州勞務協會設立

〔高雄州臨時情報部〕 高雄州下に

於ける海軍施設工事の圓滑なる遂行を期し、併而勞力の需給調整並に勞務者の福利増進を圖る爲寄々協議中の所九月一日高雄州勞務協會を設立せり。

旭青年學校開校

〔同部〕 高雄州唯一の本島人男子青年を對象とする旭青年學校(高雄三塊厝八一〇、旭公學校内)は興亞の意氣も高らかに意義深く九月二十六日開校せられたり。本校は時局下教育施設として最も機宜を得たるものにして洋々たる前途を囑目され居れり。

高雄商工專修

學校新校舍成る

〔同部〕 八月十六日輸出振興對策に付當所貿易部會にて研究したる結

果左記事項を決定せり。

〔同部〕 昭和十年四月二十日高雄第一小學校の一部を假校舍として開校せる商工專修學校は約四年間不便を感じつゝも實務的人物の養成に邁進して來たが、今や高雄の重工業地帯麒麟甲の一角に瀟灑なる校舍新築され、九月二十二日盛大なる落成式が舉行せられた、同校は動勞を重視し商業、工業に従事する者に須要な知識技能を修得させ確固たる信念を有する實務的人物の養成を目的とした特殊な學校で、完備せる校舍に依り今後の發展が期待されてゐる。

高雄商工

會議所貿易部評議

口 補助金下附を申請すべきもの

新輸出品にして補助金下附を必要とするものを各貿易業者より具體的に提出せしめ貿易部會に於て審議の上當局へ陳情に及ぶこと。

3. 特殊保税倉庫に關する件
税關坂田氏調査の特殊保税工場に關する複寫を印刷に附し各業者に配布し其の設立を奨励すること。

4. 輸出振興に關する懇談會の件
知事、部長、州市各勸業課長、林務、農務、水産及畜産の各技師、税關獎勵館及會議所會頭、副會頭及貿易部員等を以て懇談會を開催すること其の結果に依りては専門家の小委員會の結成に進むこと。

5. 販路開拓の件
生産奨励、改良等の問題と販路の開拓は平行的に行はるべきであるが之をよく調査研究し置くこと。

高雄港灣協會誕生

〔同部〕 赤堀高雄州知事は、事變後興亞建設態勢の進展と南方國策の具體化につれてその第一線港として日一日重大性を負加されつゝある高雄港の特殊性に鑑みて特に「港」の整備に意を注ぎ曩に官民懇談會を開いて港灣機能の再検討を行つたが、今尙更に赤堀知事を會長に市内關係官民を以つて高雄港灣協會を結成徹底的な調査を行ふこととなり去る九月八日高雄州商工獎勵館に於て目出度

く發會式を擧げ、式後直に會議に入り協議の結果分科委員を擧げ、各別に調査を開始その結果に基き種々督府當局宛改善建議を行ひ南方國策據點としての高雄港の使命達成に積極的に活動を開始することになつた。

昭和十四年十月十九日印刷 (月三回發行)
昭和十四年十月廿一日發行
臺灣總督府臨時情報部
臺北市榮町二丁目十五番地
印刷人 加藤 豊吉
臺北市京町二丁目四十三番地
印刷所 小塚本店印刷工場

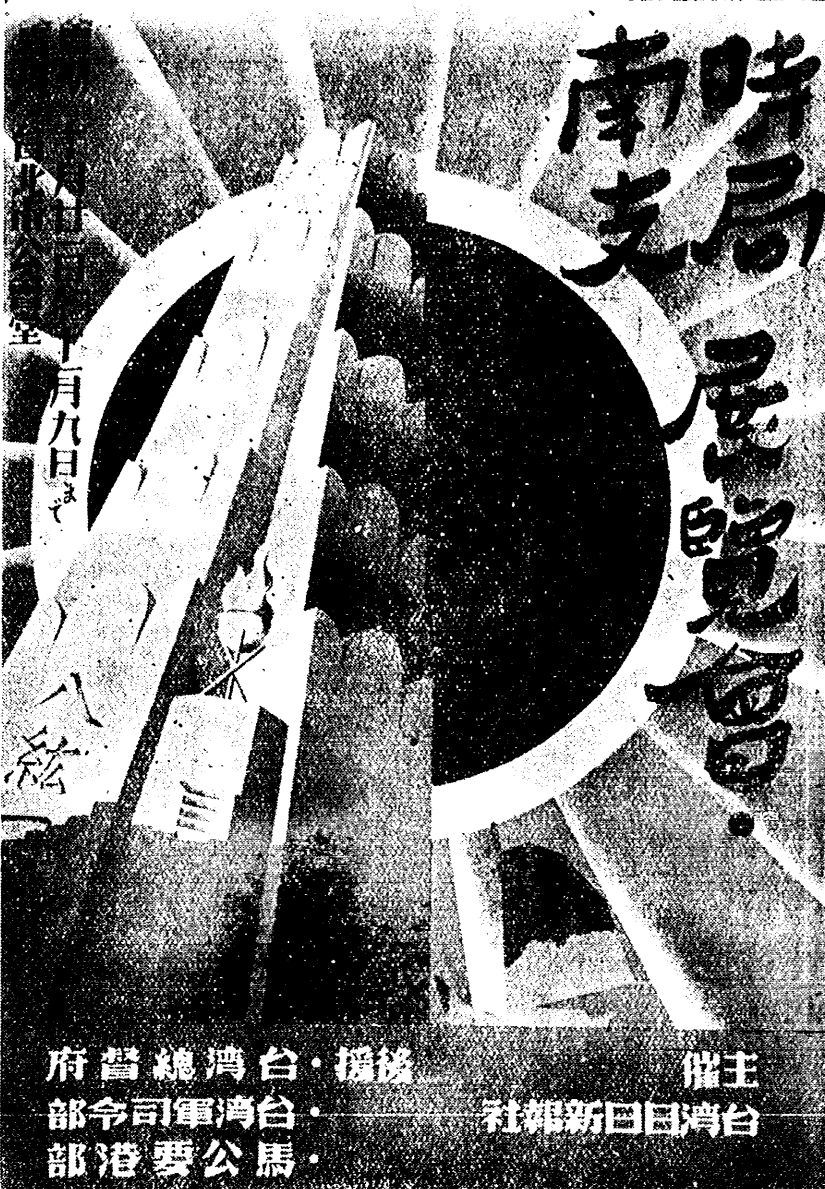
臺灣總督府官房企畫部編

國家總動員法及關係法規集

本書ハ國家總動員法、輸出入品等ニ關スル臨時措置ニ關スル法律、臨時資金調整法及外國爲替管理法、並ニ之等ノ法律ニ基ク勅令、府令、訓令、告示、通牒等ノ臺灣關係法規ヲ輯録ス、尙法令改正ノ都度追録發行實費ヲ以テ配付ス
官廳以外ノ希望者ハ追録代トシテ金五十錢御前納相成度シ

價格 壹圓五拾錢(送料共)
體裁 求ケツト型、總クローズ、加除式
頁數 七六〇頁

發行所 臺灣總督府内 臺灣時報發行所
振替臺灣二〇七〇番



時局
南支
展覧會

府營總灣台・援後 催主
部令司軍灣台・社報新日日灣台
部港要公馬

部報
昭和三年九月二十日第三種郵便物認可
昭和十四年十一月一日、十一日、廿一日發行 第七十七號

—本書の大きさは國定規格A5列—